

朱子語類論文篇譯注(四)

興膳宏

京都大學

木津祐子

京都大學

齋藤希史

奈良女子大學

91 論胡文定公文字皆實、但奏議每件引春秋、亦有無其事而遷就之者。大抵朝廷文字、且要論事情利害是非令分曉。今人多先引故事、如論青苗、只是東坡兄弟說得有精神、他人皆說從別處去。德明。

胡文定公の文章を論じられて、「一字一字に中身があるが、奏議にはいつも『春秋』を引いて、ありもせぬ事柄にこじつけをすることがある。だいたい朝廷の文章は、まず事柄の利害是非をはつきりわかるように論じるものだ。今の人とはかくまず故事を引く。たとえば青苗を論じたもの

では、東坡兄弟だけがしつかり述べていて、他の者はみな議論が別の方へ行つてしまっている。」廖德明記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「論胡文定公文字皆實」 ↓ 「論胡文定公文字皆實」 ↓ 「德明」(記録者名) ↓ 「德」

(注) 「胡文定公」は、胡安國(一〇七四―一一三八)、字は康侯、文定は諡。「春秋」に造詣深く、「春秋傳」三十卷を著した。他に「通鑑學要補遺」一百卷がある。「宋史」卷四三五、「宋元學案」卷三四。なお「語類」は卷一〇一「程子門人 胡康侯」の項に、朱子の胡安國に對する評を集める。また、その「春秋傳」については、卷八三「春秋 綱領」に詳しい。

「遷就」は、無理に引き寄せること。「讀書法」下65條を參照。

蘇軾・蘇轍ともに青苗法に反對したことはよく知られている。蘇軾には、「諫買浙燈狀」「上神宗皇帝書」(蘇軾文集)卷二五。後者は「再上皇帝書」とともに「萬言書」とも題されるが、他人の手が加わっている疑いの強いこと、小川環樹先生に指摘がある。「中國文明選」蘇東坡集(參照)などがあり、蘇轍には「論青苗狀」「再論青苗狀」(樂城集)卷三九)などがある。

92 胡侍郎萬言書、好令後生讀、先生舊親寫一冊。又曰、

「上殿劄子論元(老)〔者〕好、無逸解好、請行三年喪劄子極好。諸奏議・外制皆好。」

胡侍郎の「萬言書」は、よく若い者に讀ませられた。先生も昔ご自分で一冊書寫された。またいわれるには、「上殿劄子」の「元」を論じたものはよい。「無逸解」もよいし、「請行三年喪劄子」もたいへんよい。諸々の奏議や外制もみなよい。」

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「論元老」↓「論元者」(譯文はこれによった)

(注) 「胡侍郎」は、胡寅(一〇九八—一一五〇)、字は明仲、諡は文忠、號は致堂。胡安國の甥であり、その養子となつた。『讀史管見』三十卷を著し、また文集に『斐然集』三十卷がある。「侍郎」の稱は禮部侍郎であつたことによる。『宋史』卷四三五、『宋元學案』卷四一。前述の「程子門人胡康侯」に胡寅についても五條を記録し、「胡致堂議論英發、人物偉然」などと高く評價する。

「萬言書」は、「上皇帝萬言書」(『斐然集』卷一六)。徽宗および欽宗が金軍に捕えられ、宋朝が南渡を餘儀なくされたおり、高宗に上書して、兩帝の奪還が急務であり、いま即位すべきでないことを説いたその書。

「上殿劄子」は、「乙卯上殿劄子」(『斐然集』卷一〇)。「無逸解」は、「無逸傳」(『斐然集』卷二二)。「請行三年喪劄子」は、『斐然集』卷一に見える。

93 陳幾道存誠齋銘、某初得之、見其都是好義理堆積、更看不辦。後子細誦之、却見得都是湊合、與聖賢說底全不相似。其云、「又如月影散落萬川、定相不分、處處皆圓。」這物事不是如此。若是如此、孔孟却隱藏著不以布施、是何心哉。乃知此物事不當恁地說。營

陳幾叟の「存誠齋銘」は、手に入れたときには、それが見なすばらしい義理の積み重ねだと思ひ、それ以上見抜けなかつた。後になつてよくよく口に出しているうちに、みな寄せ集めで、聖賢の言つたこととは似ても似つかないとなつた。そのなかに、「(天理の所在は)ちようど月が萬づの川面に影を落としながら、その定形は分散することなく、どこでもまるいようなものだ」といつているが、そういうことではないのだ。もしそういうことだとすると、孔子や孟子は隠して人に與えなかつたことになるが、そんな

心であるはずがない。それで、こういうふうに言つてはいかんと、分かつたのだ。黄營記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

「陳幾道」は、陳幾叟の誤り、すなわち陳淵(？)一—一四五)。  
幾叟は字、また知黙とも字し、黙堂先生と稱される。

「默堂集」二十二卷。「宋史」卷三七六、「宋元學案」卷三八。

「存誠齋銘」は、「默堂先生文集」卷二十。「……其天守全、天理所在、如鏡如像、有來斯應、不與俱往。又如月影、散落萬川、定相不分、處處皆圓。……」とある。

「物事」は、モノ・コト兩様の意で用いられるが、ここでは事柄の意。

94 張子韶文字、沛然猶有氣、開口見心、索性說出、使人皆知。近來文字、開了又闔、闔了又開、開闔七八番、到結末處又不說、只恁地休了。至。

張子韶の文章は、勢いがあつて氣力にみち、口を開くや本心を示し、きつぱりと説いて、だれにも分かるようになっていゝ。近頃の文章ときたら、言い出しては止め、止めては言い出して、それを七八回も繰り返すうち、結論に至ると又口を閉ざし、そのままおしまひになつてしまふ。楊

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

至記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「張子韶」は、張九成(一〇九一—一一五九)、子韶は字、諡は文忠。「宋史」卷三七四、「宋元學案」卷四〇。

「讀書法」下123條に既出。朱子はその經學を「禪者之經」と非難したが、「張子韶學問雖不是、然他却做得來高、不似今人卑汚」(「陳君舉」一一三・2962)のように、本條と通じる評價も散見される。

「開口見心」は、禪語にも見える「開口見膽」に同じ。

「索性」は、きつぱり、はっきり。「爲學若不靠實、便如釋老談空、又却不如他說得索性」(「陸氏」一一四・2978)。

95 文章輕重、可見人壽夭、不在美惡上。白鹿洞記力輕。韓元吉雖只是胡說、然有力。吳達文字亦然。楊。

文章の輕重で、その人の壽命が分かる。文のよしあしにあるのではない。「白鹿洞記」は力が軽い。韓元吉はでたらめばかり言うけれども、力はある。吳達の文章もそうだ。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「白鹿洞記」は、呂祖謙の「白鹿洞書院記」(「東萊

集』卷六)。白鹿洞書院は五代・南唐昇元年間、「廬山國學」として創建され、宋に入ってから「白鹿國庠」と稱され、その後衰微したが、知南康軍となった朱子によって再建された。この「白鹿洞書院記」について朱子がかなり細かく注文をつけていることは、『朱文公文集』卷三四に載せられた呂祖謙への書翰からも窺える。

「韓元吉」は、17條、また90條を参照。

「吳達」は、字は公路、崇安の人、宣和三(一一二二)年の進士。紹興年間に肇慶府及び濠州・廬州の知事となり、また提點福建刑獄を兼ね、のちに直祕閣知鼎州に任じられた。文集は傳わらない。「語類」には「舊見吳提刑達公路當官、凡下書者、須令當廳投下。却將書於背處觀之、觀畢方發付其人、令等回書。前輩處事、詳密如此」(「朱子三 外任」一〇六・2643)と傳えられる。

96 韓無咎文做著儘和平、有中原之舊、無南方啁晰之音。

佐。

韓無咎の文章は、とても穏やかに書かれていて、中原の遺風があり、南方のがちやがちやした調子がない。蕭佐記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「做著儘和平」 ↓ 「做得著者儘和平」

「佐」(記録者名) ↓ 「方子」

朝鮮古活字本 「做著儘和平」 ↓ 「做着儘和平」

(注) 「韓無咎」は、韓元吉。

「中原」は、ここでは北宋のことを指している。

「啁晰」は、がちやがちやと耳障りな音のさま。古くは宋玉「九辯」に鳥の鳴き聲として見える擬音語だが、のちに

「蟹語」の形容としてもしばしば用いられるようになった。

「嘲晰」と同源。

97 王龜齡奏議氣象大。

王龜齡の奏議は氣象が大きい。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「王龜齡」は、王十朋(一一一七―一一七二)、龜齡は字、號は梅溪。奏議の集として「梅溪先生廷試策奏議」五

卷があり、またそれをも含めて「梅溪集」五十四卷がある。

朱子は「王梅溪文集序」(『朱文公文集』卷七五)を記し、や

はりその氣宇壯大を讚える。『宋史』卷三八七、『宋元學案』

卷四四。

98 曾司直大故會做文字、大故馳聘有法度。裘父大不及他。

裘父文字澁、説不去。義剛。

曾司直はとくに文章がうまく、奔放に馳せ回りながらさまりがある。裘父は彼にとても及ばない。裘父の文章は分りにくく、もたもたしている。黄義剛記す。

(注) 「曾司直」は、「裘父」の父、曾晦之。「直齋書錄解題」卷十八「艇齋雜著」に「(曾)鞏之弟曰湘潭主簿宰、宰之孫曰大理司直晦之、季狸其子也」とあるが、詳細は不明。

「大故」は、「大古」とも表記し、「とりわけ」もしくは「おおむね」の意だが、ここは前者。

「裘父」は、曾季狸、裘父は字、號は艇齋。曾鞏の弟宰の曾孫にあたる。呂本中に師事し、朱子とも交遊があった。

『艇齋詩話』一卷がある。『宋元學案』卷二六。

99 陳君舉西掖制詞殊未得體。王言溫潤、不尙如此。胡明仲文字却好。義剛。

陳君舉が中書舍人として書いた制詞は、ちつとも體を爲していない。帝王の言葉にはうるおいがあつて、こんなふうではいかん。胡明仲の文章のほうがよい。黄義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「不尙如此」↓「不當如此作」 「胡明仲文字却好」↓缺 「義剛」(記錄者名)↓「德明」

(注) 「陳君舉」は、陳傅良(一一三七—一二〇三)、君舉

は字、號は止齋。寧宗が即位すると、召されて中書舍人となる。『止齋文集』五一卷がある。『宋史』卷四三四、『宋元學案』卷五三。『語類』は卷一二三三に「陳君舉」の項を立てて、朱子の批評を集める。

「王言」は、帝王の言葉。「禮記」緇衣に「子曰、王言如絲、其出如綸。王言如綸、其出如紵。」

「西掖」は、中書省のこと。中書舍人であった陳傅良には、多くの制詔がある。ちなみに「止齋文集」は卷十に「内制」、卷十一から十八までに「外制」を収める。

「胡明仲」は、胡寅。92條參照。紹興四年に中書舍人となつた。

100 或言、「陳蕃叟武不喜坡文、戴肖望溪不喜南豐文。」先生曰、「二家之文雖不同、使二公相見、曾公須道坡公底好、坡公須道曾公底是。」道夫。

ある人がいった、「陳蕃叟武は東坡の文章が嫌いで、戴肖望溪は南豐の文章が嫌いですね。」先生がいわれるには、「(東坡と南豐の)二人の文章は違うが、もし二公があい見えたなら、曾公は坡公のがうまいというだろうし、坡公は曾公のがよいというだろうさ。」楊道夫記す。

〔校勘〕朝鮮古寫本 「或言」↓「或道」 「陳蕃叟武不喜坡文」↓「陳武不善坡文」 「戴肖望溪」↓「戴溪」

朝鮮古活字本 「陳蕃叟武」↓「陳蕃叟武（武のみ細字）」  
「戴肖望溪」↓「戴肖望溪（溪のみ細字）」（なお本文はこれに従った）

〔注〕「陳蕃叟武」は、陳武、字は蕃叟。陳傅良の族弟。  
『宋元學案』卷五三。

「戴肖望溪」は、戴溪（？—一二一五）、字は肖望。『宋史』卷四三四、『宋元學案』卷五三。

101 德粹語某人文章。先生曰、「紹興間文章大抵粗、成段時文。然今日太細膩、流於委靡。」問賢良。先生曰、「賢良不成科目。天下安得許多議論。」可學。以下論近世之文。

德粹がある人の文章を評した。先生がいわれるには、「紹興のころの文章はだいたい粗雑で、まるまる受験用の文章だ。しかし今の文章はきめが細かすぎて、弱弱しくなつてしまった。」賢良について尋ねると、先生がいわれるには、「賢良は、科目にはならん。天下にどれほど議論があるものか。」鄭可學記す。以下近世の文を論ず。

〔校勘〕朝鮮古寫本 「大抵粗」↓「大抵籠」 「以下論近

世之文」↓缺

朝鮮古活字本 「大抵粗」↓「大抵籠」

〔注〕「德粹」は、滕璘（一一五〇—一二二九）、德粹は字、號は溪齋。朱子の門人。「是日德粹又語小學。先生曰、「德粹畢竟昏弱。子上尙雜、更宜加意。」」（朱子十五 訓門人六一—一八・282）などの言葉を受けている。

「成段」は、文章全體ということ。「明道言語甚圓轉、初讀未曉得、都沒理會。子細看、却成段相應。」（程子之書一 九五・241）

「賢良」は、科擧の科目。起源は漢代に遡るが、宋代ではまた制科（天子が詔を發して異才を拔擢する試験）の總稱であること、高承『事物起源』卷三に「漢唐逮宋、取士之制有賢良方正・茂才異等六科、謂之制擧、亦曰大科、通謂之賢良」とあるごとくである。『語類』にはまた以下のように論じる。「坐中有說赴賢良科。曰、「向來作時文應擧、雖是角虛無實、然猶是白直、却不甚害事。今來最是喚做賢良者、其所作策論、更讀不得。緣世上只有許多時事、已前一齊話了、自無可得說。如笨酒相似、第一番淋了、第二番又淋了、第三番又淋了。如今只管又去許多糟粕裏只管淋、有甚麼得話。既無可得話、又只管要新。最切害處、是輕德行、毀名節、崇智術、尙變詐、讀之使人痛心疾首。不知是甚世變到這裏、可畏、可畏。」（論取士一〇九・2701）

102 「諸公文章馳騁好異。止緣好異、所以見異端新奇之說從而好之。這也只是見不分曉、所以如此。看仁宗時制詔之文極朴、固是不好看、只是它意思氣象自恁地深厚久長。固是拙、只是他所見皆實。看他下字都不甚恰好、有合當下底字、却不下、也不是他識了不下、只是他當初自思量不到。然氣象儘好、非如後來之文一味纖巧不實。且如進卷、方是二蘇做出恁地壯偉發越、已前不會如此。看張方平進策、更不作文、只如說鹽鐵一事、他便從鹽鐵原頭直說到如今、中間却載著甚麼年、甚麼月、後面更不說措置。如今只是將虛文漫演、前面說了、後面又將這一段翻轉、這只是不會見得。所以不會見得、只是不會虛心看聖賢之書。固有不會虛心看聖賢書底人、到得要去看聖賢書底、又先把他自己一副當排在這裏、不會見得聖人意。待做出、又只是自底。某如今看來、惟是聰明底人難讀書、難理會道理。蓋緣他先自有許多一副當、聖賢意思自是難入。」

「諸公の文章はあちこち跳ね回って奇拔さを求める。奇拔さを求めるだけなので、異端新奇の説を目にすると、追従珍重してしまふ。これもただ物の見方がはつきりしてい

ないから、こうなってしまうのだ。仁宗の時の制詔の文はごく素朴で、もちろん見映えはしないが、その内容風格はおのずとあのように重厚深長だ。もちろん不器用なものだが、その考えにはみな中身がある。見たところ文章の使い方がどれもあまりしつくりせず、使うべき文字があるのに使っていないが、それも書き手が知っていて使わなかったのではなく、最初から考えつかなかっただけなのだ。けれども風格はすばらしく、後世の文章がもっぱら器用で中身がないのとは違ふ。進卷の文章などは、二蘇に至つてようやくあれだけ雄大に展開するようになったけれど、以前はああじゃなかつた。張方平の進策を見ても、まったくかざりが無い。鹽鐵のことを論じたものにしても、彼は鹽鐵の由來から今に至るまでをずっと述べたてて、途中では何年どう、何月にと記しはするが、後ろの方では何も措置を述べていない。近頃ではただ内容のない文をだらだら連ねるばかりで、前の方で言ったことを、後ろの方でひっくり返したりするが、これもただわかつていないからだ。わかつていないのは、虚心に聖賢の書物を讀んだことがな

いからだ。じつさい虚心に聖賢の書物を讀んだことのない人は、いざ聖賢の書物を讀もうとすると、まず自分の先入見をそこに並べてしまい、聖人の意がわからない。文章を書く段になつても、やはり自分の考えになつてしまふ。私がいま思うに、頭のいい人ほど書物を讀むのが難しく、道理を悟るのが難しい。そういう人はまず自分に多くの先入見があるから、聖賢の考えもおのずと入りにくい。」

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「仁宗」↓「神宗」 「纖巧不實」↓「儉巧不實」 「先把他自一副當排在這裏」↓「先把他自一場副當排在這裏」 「先自有許多一副當」↓「先自有許多副當」

朝鮮古活字本 「有口固能言天下之事」↓「有口固當言天下之事」 「若只守這心」↓「若只守此心」

〔注〕 「馳騁」は、41條參照。  
「異端」は、聖人の學にあらざるもの。たんに儒教以外の教えを非難していうのではないこと、以下のごとくである。

「江西學者偏要說甚自得、說甚一貫。看他意思、只是揀一箇籠侗底說話、將來籠罩、其實理會這箇道理不得。且如曾子日用間做了多少工夫、孔子亦是見他於事事物物上理會得這許多道理了、却恐未知一底道理在、遂來這裏提醒他。然曾子却是已有這本領、便能承當。今江西學者實不曾有得這本領、不知

是貫箇甚麼。嘗譬之、一便如一條索、那貫底物事、便如許多散錢。須是積得這許多散錢了、却將那一條索來一串穿、這便是一貫。若陸氏之學、只是要尋這一條索、却不知道都無可得穿。且其爲說、喫緊是不肯教人讀書、只恁地摸索悟處。譬如前面有一箇關、纔跳得過這一箇關、便是了。此煞壞學者。某老矣、日月無多。方待不說破來、又恐後人錯以某之學亦與他相似。今不奈何、苦口說破。某道他斷然是異端。斷然是曲學。斷然非聖人之道。但學者稍肯低心向平實處下工夫、那病痛亦不難見。」〔論語九 里仁篇下〕二七・683)

「見得」は、わかる。ここでは、「見得道理」と同じく、道理がわかるということ。

「仁宗」は、天聖元(一〇三三)年から嘉祐八(一〇六三)年まで在位。「制詔」云云は、41條に述べるところと同様である。

「恰好」は、しつくりくる、びつたりするの意。「語類」中によく使われる。「先生愛恰好二字、云、凡事自有恰好處。」〔朱子四 內任〕一〇七・362)

「一味」は、ただもう、ひたすら。「便是世間有這一般半間不界底人、無見識、不顧理之是非、一味謾人。」〔論語二九 陽貨篇〕四七・1187)

「纖巧」は、技巧に走ること。「向來做時文、只粗疏恁地直說去、意思自周足、且是有氣魄。近日時文屈曲纖巧、少刻墮在裏面、只見意氣都衰塌了。也是教化衰、風俗壞到這裏、

是怎生。」〔學七 力行〕一三・247)

「進卷」は、ここでは科擧に應じて作られた文章のこと。

「二蘇」は、蘇軾と蘇轍。

「發越」は、のびのびと展開すること。疊韻の語。「讀書法上」65條參照。

「張方平」は、字は安道、一〇〇七—一〇九一、樂全居士と號した。景祐元(一〇三四)年の進士。『樂全集』四十卷がある。『宋史』卷二一八、『宋元學案』卷三。

「進策」は、『論國計事』(『樂全集』卷二四、『宋文鑑』卷四七)を指す。

「鹽鐵」は、國家の財政のこと。

「措置」は、處置、對應。ここでは具體的な政策のことをいう。「今日天下、且得箇姚崇李德裕來措置、看如何。」(朱子五 論治道)一〇八・268)

「漫演」は、疊韻の語。だらだらとして中身のないこと。

蔓衍、蔓衍などと同じ。「國語辭多理寡、乃衰世之書、支離蔓衍、大不及左傳。」(『禮一 論修禮書』八四・218)

「一副當」は、ここでは、持ち前の考え、觀念。「問、

「我非生而知之者、好古敏以求之者。」聖人之敏求、固止於禮樂名數。然其義理之精熟、亦敏求之乎。」曰、「不然。聖人於義理、合下便恁地。「固天縱之將聖、又多能也。」敏求、則多能之事耳。其義理完具、禮樂等事、便不學、也自有一副當、但力可及、故亦學之。若孟子於此等、也有學得底、也有不曾

學得底、然亦自有一副當、但不似聖人學來尤密耳。」(『論語十六 述而篇』三四・891)

「待」は、「しようとする」の意。「將」に同じ。

因說、「陳叔向是白撰一箇道理。某嘗說、教他據自底所見恁地說、也無害、只是又把那說來壓在這裏文字上。他也自見得自底虛了行不得、故如此。然如何將兩箇要捏做一箇得。一箇自方、一箇自圓、如何總合得。這箇不是他要如此、止緣他合下見得如此。如楊墨、楊氏終不成自要爲我、墨氏終不成自要兼愛、只緣他合下見得錯了。若不是見得如此、定不解常如此做。楊氏壁立萬仞、毫髮不容、較之墨氏又難。若不是他見得如此、如何心肯意肯。陳叔向所見咤異、它說「目視己色、耳聽己聲、口言己事、足循己行。」有目固當視天下之色、有耳固當聽天下之聲、有口固能言天下之事、有足固當循天下之行、他却如此說。看他意思是如此、只要默然靜坐、是不看眼前物事、不聽別人說話、不說別人是非、不管別人事。又如說「言忠信、行篤敬」一章、便說道緊要只在「立則見其參於前、在輿則見其倚於衡。」問道、「見是

見箇甚麼物事。」他便說、「見是見自家身己。」某與說、「立」是自家身己立在這裏了、「參於前」又是自家身己、「在輿」是自家身己坐在這裏了、「倚於衡」又是自家身己、却是兩箇身己。又說格物做心、云、「格住這心、方會知得到。」未嘗見人把物做心、與他恁地說、他只是自底是。以此知、人最是知見爲急。聖人尙說、「學之不講、是吾憂也。」若只恁地死守得這箇心便了、聖人又須要人講學何故。若只守這心、據自家所見做將去、少間錯處都不知。」賀孫。そこでいわれるには、「陳叔向は見當はずれの道理を説いている。前にもいったが、自分の考えに據つてああいうふうにいわせておくのなら、まあ構わんが、ああいつていたことをこつちの文章に覆いかぶせてしまう。彼も自分の考えに自身が無くってだめだと自分でわかっているから、こんなふうにするわけだ。けれども二つのものをどうやって一つにこねあげるといふのだ。一方は四角で一方は丸なのに、どうして合わせられよう。これは彼がそういうふうにしようとおもつたのではなく、彼にはその時そうとしか思えなかつたということに過ぎん。例えば楊墨は、楊氏がま

さかみずから「爲我」を求めたわけでもないし、墨氏がまさかみずから「兼愛」を求めたわけでもなく、ただその時見當違ひをしていたまでなのだ。もしそう考えていなかつたら、ずっとあんなふうに書けはしまい。楊氏の説は聳え立つ絶壁のようで、髮一すじの隙間もなく、墨氏に比べてもさらに難しい。もしこう考えていなかつたら、どうして心から納得できよう。陳叔向の考えは奇怪だ。彼は「目は己れの色を視、耳は己れの聲を聞き、口は己れの事を言ひ、足は己れの行に循う」というが、目があれば天下の色が視えるはずだし、耳があれば天下の聲が聞こえるはずだし、口があれば天下の事を言えるはずだし、足があれば天下の行に循えるはずなのに、あんなことをいう。彼の考えがこんなふうだとすると、ただ黙然と靜坐して、目の前の事も見ず、他人の話も聞かず、他人の是非もいわず、他人の事も構わなくてよいことになる。また、「言は忠信、行は篤敬」の一章を説いて、重要なのはただ「立ちては則ち其の前に參ずるを見、輿に在りては則ち其の衡に倚るを見る」といふところだという。「見るとは何を見るのか」

と訊いてみたら、「見るとは自分自身を見るのだ」という。で、言つてやった、「立つ」とは自分自身がこうして立つてゐることだから、(もし「自分自身を見る」のだとすると)「前に參ずる」のも自分自身になる。「興に在る」とは自分自身がこうして座つてゐることだから、(もし「自分自身を見る」のだとすると)「衡に倚る」のも自分自身になつて、二人の自分があることになるなあ」と。また彼は物に格(いた)り心(こゝろ)を做(な)すことを説いて、「この心にしっかりと格つてこそ、わかるといふことだ」といふ。人が物を捉えて心をなすことが分かつていなくて、そういうふうについてやつても、自分の考えが正しいとするばかりだ。ここから分かるように、人にはことに知見が急務だ。聖人もやはり「學の講ぜざる、是れ吾が憂いなり」といわれた。ああやつてこの心を後生大事にすればいいというのなら、聖人が人に學問を求めたのはどういふわけだろう。この心を守り、自分の考へに據つてやつていくだけなら、じきに間違ひにもまつたく氣づかなくなつてしまふさ。」葉賀孫記す。

(校勘) 「壓在這裏文字上」↓「塵在這裏文字上」 「毫髮

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

不容」↓「豪髮不容」 「這却是兩箇身已」↓「却是兩箇身已」 「若只恁地死守得這箇心便了」↓「若只恁地死守得這箇心便了」

朝鮮古活字本 「有口固能言天下之事」↓「有口固當言天下之事」 「若只守這心」↓「若只守此心」

(注) 「陳叔向」は、陳葵(一一三九―一一九四)、叔向は字。朱子とはその學說こそ共にしなかつたものの、互いに重んじた。『宋元學案』卷六一。「陳叔向也自說一樣道理。某嘗說、這樣說話、得他自立箇說、說道我自所見如此、也不妨。只是被他說出一樣、却將聖賢言語硬折入他窩窟裏面。據他說底、先賢意思全不如此。」(《論語九 里仁篇》二七・700)

「白撰」は、裏付けもないのでために説くこと。「家語雖記得不純、却是當時書。孔叢子是後來白撰出。」(《戰國漢唐諸子》一三七・352)

「楊墨」は、楊朱と墨子。楊朱は個人の利のために行動する「爲我」を説き、墨子は親疎分け隔てなく愛する「兼愛」を説いた。孟子は「聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言、盈天下。天下之言、不歸楊則歸墨。楊氏爲我、是無君也。墨氏兼愛、是無父也。無父無君、是禽獸也。」(《滕文公下》)と攻撃する。

「終不成」は、まさかではあるまいの意。「終」は強めで、「不成」のみの形でもよく用いられる。現代語では「難道不成」の形をとるが、近世白話では句頭に用いられるこ

とが多い。

「身己」は、自分自身。

「言忠信、行篤敬」は、『論語』衛靈公篇のことば。「子張問行。子曰、言忠信、行篤敬。雖蠻貊之邦、行矣。言不忠、信行不篤。敬雖州里行乎哉。立則見其參於前也。在輿則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。」

「學之不講是吾憂也」は、『論語』述而篇のことば。「子曰、德之不脩。學之不講。聞義不能徙。不善不能改。是吾憂也。」

103 今人作文、皆不足爲文。大抵專務節字、更易新好生面辭語。至說義理處、又不肯分曉。觀前輩歐蘇諸公作文、何嘗如此。聖人之言坦易明白、因言以明道、正欲使天下後世由此求之。使聖人立言要教人難曉、聖人之經定不作矣。若其義理精奧處、人所未曉、自是其所見未到耳。學者須玩味深思、久之自可見。何嘗如今人欲說又不敢分曉說、不知是甚所見。畢竟是自家所見不明、所以不敢深言、且鶴突說在裏。寓。

近頃の人の書く文章は、みな文章といえるようなものじゃない。だいたいはもっぱら字句を切り詰めて、見てくれ

がよく目新しい言葉にいい換える。義理を説く段になると、わかるようにいおうとしない。一昔前の歐蘇の諸公が文章を書くときは、とてもこんなふうじゃなかった。聖人の言は平易ではつきりしており、言によつて道を明らかにしている。まさに天下・後世の人々にそれによつて道理を求めさせようとされたからだ。もしも聖人が言を立てて人に分からせまいとされたのなら、聖人の經は、生まれなかつたに違いない。義理の奥深いところを、人がまだ分らないのは、その人の理解がそこまで達していないというまでだ。學ぶ者は、よく味わいよく考えよ、長い時間かければおのずと分かってくる。近頃の人のように説きたがるくせにわかるように説けもせず、どういう考えなのか分からんなんとんでもない話だ。要するに自分でも考えがはつきりしないから、深いところまでとてもいえず、いい加減にお茶を濁しているのさ。徐寓記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「玩味深思」↓「玩味深意」

(注) 「節字」は、次の104條との関連から、字句をきりつめることと解したが、あるいは字句(修辭)そのものの意か。

「河南程子遺書」卷一八「伊川先生語四」に「今爲文者、專務章句、悅人耳目。既務悅人、非俳優而何。」と云う。

「更易」は、改める、變える。

「生面」は、見慣れない、目新しい。

「歐蘇」は、歐陽脩と蘇軾。

「立言」は、『左傳』襄公二十四年の「大上有立德、其次有立功、其次有立言。雖久不廢、此之謂不朽。」を踏まえた語。

「鶴突」は、いいかげんなこと。「糊塗」「忽突」などと同じ。「讀書法上」51條を參照。

104 前輩文字有氣骨、故其文壯浪。歐公東坡亦皆於經術本領上用功。今人只是於枝葉上粉澤爾、如舞訝鼓然、其間男子・婦人・僧・道・雜色、無所不有、但都是假底。舊見徐端立言、石林嘗云、「今世安得文章。只有箇減字換字法爾。如言「湖州」、必須去「州」字、只稱「湖」、此減字法也。不然、則稱「書上」、此換字法也。」方子。蓋卿錄云、「今人做文字、却是胭脂膩粉粧成、自是不壯浪、無骨氣。如舞訝鼓相似、也有男兒、也有婦女、也有僧・道・秀才、但都是假底。嘗見徐端立言、石林嘗云、「今世文章只是用換字、減字法。如說「湖州」、

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

只說「湖」、此減字法。不然、則稱「書上」、此換字法。嘗見張安道進卷、其文皆有直氣。」謙錄云、「今來文字、至無氣骨。向來前輩雖是作時文、亦是朴實頭鋪事實、朴實頭引接、朴實頭道理。看著雖不入眼、却有骨氣。今人文字全無骨氣、便似舞訝鼓者、塗眉畫眼、僧也有、道也有、婦人也有、村人也有、俗人也有、官人也有、士人也有、只不是本樣人。然皆足以惑衆、真好笑也。」或云、「此是禁懷挾所致。」曰、「不然。自是時節所尚如此。只是人不知學、全無本柄、被人引動、尤而效之。正如而今作件物事、一箇做起、一人學起、有不崇朝而徧天下者。本來合當理會底事、全不理會、直是可惜。」

一昔前の文章には氣骨があり、だからその文もたくましかった。歐公や東坡はみなやはり經學という根本に力を注いでいる。近頃の人はひたすら枝葉末節のところ飾り立てるばかりだ。訝鼓がこの踊りを舞うようなもので、そこには男に女、僧侶に道士、雑多な役となんでも揃っているが、すべて作り物だ。以前徐端立がこういつているのを讀んだ、「石林がかつて云うには「今の世に文章なんてあるものか。ただ減字法と換字法があるだけさ。例えば「湖州」という

のに、必ず「州」を取り去つて、「湖」とだけいう、これが減字法だ。でなければ「晉上」という、これが換字法だ。」李方子記す。襲蓋卿の記録には、「近頃の人が文章を書くのは、紅や白粉で化粧をするようなもので、たくましさもなければ、氣骨もない。ちようど誦鼓の踊りを舞うようなもので、男あり、女あり、僧侶に道士に秀才ありだが、すべて作り物だ。以前徐端立がこういつているのを讀んだ、「石林がかつて云うには、「今の世の文章は、ただ換字法と減字法を使うだけだ。例えば「湖州」というのに、「湖」とだけいう、これが減字法だ。でなければ「晉上」という、これが換字法だ。」以前張安道の科擧の答案を見たが、その文章はみなしゃんとした氣骨があつた。」廖謙の記録には、「近頃の文章は、まったく氣骨がない。かつて先輩たちは受驗用の文章を書くにも、實直に事實を並べ、實直に典據を引き、質實に道理を述べた。見映えはしないが、氣骨はある。近頃の人の文章はまったく氣骨がなく、誦鼓の踊りを舞うようなもので、眉を描き目に隈取りをし、僧侶あり、道士あり、婦人あり、村人あり、俗人あり、役人あり、讀書人ありだが、本物ではない。だがみな人々を惑わすには十分で、まったくお笑い

だ。」ある人が、「科擧で虎の巻を禁止した結果です」というと、いわれるには、「そうじゃない。もともと時代の好尚がこうなのだ。學ぶということを知らず、まったく根本がないので、人に引かずられて、ついまねしてしまふのだ。ちようど最近何か新しいことをやるのに、誰かがやり出すと、誰かが眞似をして、たちまちのうちに天下に廣まつてしまふことがあるのと同じだ。本來取り組むべきことには、まったく取りあおうとしない、實に殘念だ。」

(校勘) 朝鮮古寫本 「舊見徐端立言」 ↓ 「舊見徐端立文言」 「方子」(記錄者) ↓ 「公晦」 「蓋卿錄云」 ↓ 「按襲蓋卿有詳略、當是一時所共聞、今附注云」 「却是胭脂膩粉粧成」 ↓ 「却是燕脂膩粉粧成」 「謙錄云」 ↓ 「徳之問、陳後山文字如何、先生曰、後山文有法度、黃樓銘、既出諸公皆斂衽。按廖謙意同、今附云」 「只不是本様人」 ↓ 「只不是本様人」 「云、不然」 ↓ 「先生云、不然」 「正如而今作件物事」 ↓ 「且如而今作件物事」  
 朝鮮古活字本 「却是胭脂膩粉粧成」 ↓ 「却是燕脂膩粉粧成」 「正如而今作件物事」 ↓ 「何如而今作件物事」 「禁懷挾所致」 ↓ 「襟懷徠所致」  
 (注) 「本領」は、根本のもの、根本の實力。「讀書法下」

8條参照。

「誦鼓」は、誦鼓戲。宋代に民間で行われた扮装戲の一種。軍中より始まったと云われる。「王子醇初平熙河、邊陲寧靜、講武之暇、因教軍爲誦鼓戲、數年間遂盛行於世。其舉動舞按之節與優人之詞、皆子醇所製也。或云子醇嘗與西人對陣、兵未交、子醇命軍士百餘人裝爲誦鼓隊繞出軍前、虜見皆愕眙。進兵奮擊、大破之。」(彭乘『續墨客揮毫』)

「徐端立」は、徐度、端立は字、もと字を惇立あるいは敦立とするが、南宋・光宗の諱「惇」を避けて、端立と稱する。著に『國紀』六十卷、『却掃篇』十三卷がある。『宋元學案』卷二七。

「石林」は、葉夢得(一〇七七—一一四八)、字は少蘊、石林は號。『春秋傳』二十卷、『石林燕語』十卷、『避暑錄話』二卷、『石林詩話』一卷などの著作がある。『宋元學案』卷九六、『宋史』卷四四五。

「湖州」は、いま浙江省湖州市。「書」はここを東北流して太湖に入る霽溪のこと。

「張安道」は、張方平のこと。

「入眼」は、心にかなう、氣に入る。

「懷挾」は、科舉受験のカンニング用ノート。歐陽脩の「條約舉人懷挾文字剖子」(『奏議集』卷一五)に、「竊聞近年舉人、公然懷挾文字、皆是小紙細書、抄節甚備。每寫一本、筆工獲錢三二十千。」

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

「本柄」は、根本。また「本領」と同義。

「尤而效之」は、『左傳』僖公二十四年の「尤而效之、罪又甚焉。」を踏まえる。

105 貫穿百氏及經史、乃所以辨驗是非、明此義理、豈特欲使文詞不陋而已。義理既明、又能力行不倦、則其存諸中者、必也光明四達、何施不可。發而爲言、以宣其心志、當自發越不凡、可愛可傳矣。今執筆以習研鑽華采之文、務悅人者、外而已、可耻也矣。人傑。以下論作文。

諸子百家や經書史書に通じるのは、是非を見きわめ、義理を明らかにするためだ。まさか文章を見映えよくするためだけではあるまい。義理を明らかにした上で、さらにたゆまず努力すれば、内に蓄えられたものが、必ずや四方に輝き出て、あらゆることがうまく行く。文章に表わして、志を明らかにすれば、おのずと燦然として非凡なものとなり、愛好され傳えられるだろう。いま文章の修辭に凝ることに意を砕いて、人に氣に入られようとするのは、うわべだけのことで、恥ずかしいことだ。萬人傑記す。以下作文を

論じる。

(校勘) 朝鮮古寫本 「以下論作文」↓缺

(注) 「貫穿」は、つらぬくこと。『漢書』卷六二「司馬遷傳」の「贊」に「亦其涉獵者廣博、貫穿經傳、馳騁古今、上下數千載間、斯以勤矣。」とある。

「發而爲言……」は、『毛詩』大序の「詩者志之所之也。在心爲志、發言爲詩。」を踏まえた表現。

106 道者、文之根本。文者、道之枝葉。惟其根本乎道、所以發之於文、皆道也。三代聖賢文章、皆從此心寫出、文便是道。今東坡之言曰、「吾所謂文、必與道俱。」則是文自文而道自道、待作文時、旋去討論道來入放裏面、此是它大病處。只是它每常文字華妙、包籠將去、到此不覺漏逗。說出他本根病痛所以然處、緣他都是因作文、却漸漸說上道理來。不是先理會得道理了、方作文、所以大本都差。歐公之文則稍近於道、不爲空言。如唐禮樂志云、「三代而上、治出於一。三代而下、治出於二。」此等議論極好、蓋猶知得只是一本。如東坡之說、則是二本、非一本矣。側。

道は文の根本であり、文は道の枝葉である。道に根ざし

ていればこそ、文に現われたものも、みな道になる。三代の聖賢の文章は、みなこの心から吐露されたもので、文がそのまま道だ。いま東坡のことばに「吾の謂う所の文は、必ず道と俱にす」とあるが、これでは文は文、道は道ということになり、文章を書く段になって、あわてて道を見つけたで文中に放りこむわけで、これこそ彼の大きな缺點だ。彼はいつも文章をことば巧みに飾って、包み隠してしまいが、ここに至って思わずぼろが出て、彼の根本的な缺點の原因を白状してしまっている。かれはいつもまず文章を作るのがきっかけで、だんだん道理に説き出すのであり、まず道理に取り組んでから、文章を書くのではないから、大本がまるで駄目なのだ。歐公の文章はいくらか道に近いもので、空言ではない。『新唐書』禮樂志に「三代より上は、治は一に出づ。三代より下は、治は二に出づ」というが、こういった議論は立派なもので、やはり根本はただ一つとわかっていたからだろう。東坡の説のようだと、本は二つあって、一つではないことになる。沈側記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「到此不覺漏逗」 ↓ 「到此不覺漏透」

(注) 「吾所謂文……」は、『祭歐陽文忠公文』(『蘇軾文集』卷六三、『宋文鑑』卷二三四)の文。ただし、これは蘇軾が歐陽脩の言葉を引いたもの。

「包籠」は、包み隠す、適當に丸めこむということ。「今公讀詩、只是將己意去包籠他、如做時文相似。中間委曲周旋之意、盡不會理會得、濟得甚事。」(『詩一 論讀詩』卷八 十・2086)

「漏逗」は、ほろが出るということ。「孟子初見滕世子、想是見其資質好、遂即其本原一切爲他啓迪了。世子若是負荷得時、便只是如此了。及其復見孟子、孟子見其領略未得、更不說了。只是發他志、但得於此勉之、亦可以至彼。若更說、便漏逗了。當時啓迪之言想見甚好、惜其不全記、不得一觀。」(『孟子五 滕文公上』卷五五・1088)

「三代而上……」は、『新唐書』卷一一「禮樂志一」の「由三代而上、治出於一、而禮樂達于天下、由三代而下、治出於二、而禮樂爲虛名。」による。

107 才要作文章、便是枝葉、害著學問、反兩失也。壽昌。

もし文章を作ろうとすると、枝葉末節になって、學問を損ねてしまい、二つともだめになる。吳壽昌記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

(注) 「才……、便……」は、「……するとすぐに……」のように前後密接に連續することを示す構文。

108 詩律雜文、不須理會。科舉は無可奈何、一以門戶、一以父兄在上實望。科舉却有時、詩文之類看無出時節。芝。詩文や雜文には、取り組むことはない。科舉はどうにもならないもので、一つには一門のため、一つには父兄が上で責め立てるからだ。だが科舉には終わりがあるが、詩文などには、どうもきりが無い。陳芝記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「詩律雜文」 ↓ 「詩筆雜文」 「科舉」 ↓ 「利舉」

(注) 「雜文」は、科舉に課せられる文章。『事物紀原』卷三「雜文」に「唐貞觀八年、劉思立始令貢士試雜文、今論是也」とある。

「實望」は、期待して責め立てること。「父母實望、不可不應舉。如遇試則入去、據己見寫了出來。」(『學七 力行』一三三・247)

109 一日說作文、曰、「不必著意學如此文章、但須明理。」

理精後、文字自典實。伊川晚年文字、如易傳、直是盛得水住。蘇子瞻雖氣豪善作文、終不免疏漏處。」大雅。

ある日文章の創作についていわれた、「何もことさらこういう文章を學ぶまでもなく、道理を明らかにするのが大切だ。道理に精通すれば、文章はおのずとしっかりする。伊川の晩年の文章、たとえば『易傳』などは、まったく水も漏らさぬ緻密さだ。蘇子瞻は豪放で文章もうまいが、どうしても穴がある。余大雅記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「不必著意」↓「不必着意」 「理精後」↓「理道精後」 「終不免疏漏處」↓「終不免疎漏處」 朝鮮古活字本 「不必著意」↓「不必着意」 「終不免疏漏處」↓「終不免疎漏處」

(注) 「典實」は、中身があつてしっかりしていること。  
「呂與叔中庸義、典實好看、又有春秋、周易解。」(程子門人呂與叔「一〇一・2561」)  
「伊川」は、程頤。「易傳」は、いわゆる「伊川易傳」四卷。

「盛得水住」は、水漏らさぬほど緻密な様子。「論文上」9 條参照。

110 問、「要看文以資筆勢言語、須要助發義理。」曰、「可看孟子韓文。韓不用科段、直便說起去至終篇、自然純粹成體、無破綻。如歐曾却各有一箇科段。却曾學曾、爲其節次定了。今覺得要說一意、須待節次了了、方說得到。及這一路定了、左右更去不得。」又云、「方之文有澁處。」因言、「陳阜卿教人看柳文了、却看韓文。不知看了柳文、便自壞了、如何更看韓文。」方。

「文章を讀んで、作文の表現に役立てようとするのは、それによつて義理を明らかにするためですよね」と尋ねると、いわれるには、「孟子と韓文を讀むがよい。韓愈は段落を用いず、説き起こして一氣に終わりに至り、おのずとそのままとまつて、破綻がない。歐陽修や曾鞏の方はそれぞれいちいち段落を用いる。曾鞏の文章を學んだことがあるが、彼の文章の次第がしっかりしているためだ。何か考えを述べるには、まず文章の次第をはっきりさせてこそ、十分に説きつくせる。この道筋がしっかりすれば、脇道にはそれようがない。」また「君の文にはぎくしゃくしたところがあるね」といわれ、ついでにいわれるには、

「陳阜卿は人に柳文を讀ませてから、韓文を讀ませた。柳文を讀んだら、もうだめになってしまつて、それから韓文など讀めるわけがないじゃないか。」楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「却曾學會」↓「舊曾學會」

(注) 「科段」は、文章のまとまり。段落。

「節次」は、順番、次第。「大學如一部行程曆、皆有節次。

今人看了、須是行去。今日行得到何處、明日行得到何處、方

可漸到那田地。」(大學一 綱領一四・351)

「陳阜卿」は、陳之茂、阜卿は字、また字を卓卿ともする。

號は錫山。紹興二(一一三二)年の進士。

111 因論文、曰、「作文字須是靠實、說得有條理乃好、不可架空細巧。大率要七分實、只三分文。如歐公文字好者、只是靠實而有條理。如張承業及宦者等傳自然好。東坡如靈壁張氏園亭記最好、亦是靠實。秦少游龍井記之類、全是架空說去、殊不起發人意思。」時舉。

ついでに文を論じていわれるには、「文章を作るには事實にもとづき、筋道だった述べかたをすることが大切で、で

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

たらめな中身に些末な技巧ではだめだ。だいたい事は實が七分、文飾が三分という見當だ。歐公の文章の立派なのは、とにかく事實にもとづいて筋道だっている。張承業や宦者たちの傳はもちろん立派だ。東坡の「靈壁張氏園亭記」はとても立派だが、これも事實にもとづいている。秦少游の「龍井記」などは、まったくでまかせばかりで、人の心をしてんで動かさない。潘時舉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「張承業及宦者等傳」については、「論文上」50條を參照。

一一。「靈壁張氏園亭記」は、『宋文鑑』卷八二、『蘇軾文集』卷

一一。「秦少游」は、秦觀。「龍井記」は、『淮海集』卷三八。葛洪が鍊丹の術を行なった地であることから説き起こし、文中には神異の事を記し、また元豐二(一一〇七九)年に佛僧が大魚を泉より躍り出させたと云う。

112 文章要理會本領。謂理。前輩作者多讀書、亦隨所見理會、今皆倣賢良進卷胡作。

文章はおおもと(理のこと)をつかまなければならぬ。

一昔前の書き手はたくさん書物を讀んで、理解したところからつかんだが、いまはみな賢良の試験答案のまねごとをしてでっちあげている。

校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「賢良」については111條を參照。

113 每論著述文章、皆要有綱領。文定文字有綱領、龜山無綱領、如字說三經辨之類。方。

著作や文章には必ず眼目がなければならん、と常に論じておられた。「文定の文章には眼目があるが、龜山には眼目がなく、『字說』や『三經辨』の類だ。」楊方記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「文定」以下が細字雙行 「三經辨」↓  
「三經辯」

(注) 「文定」は、胡安國。

「龜山」は、楊時(一〇五三—一一三五)、字は中立、諡は文靖、龜山先生と稱された。程子門人であり、朱熹にとつては先輩。朱子が楊時の學問をどうとらえていたかについては、『語類』卷一〇一「程子門人 楊中立」の章に詳しい。

「字說」も「三經辨」ともに王安石の著作。科舉受験のテキストとされ、大に行われた。「三經辨」は「三經義」とも。「宋史」卷三七「王安石傳」には、「初、安石訓釋詩・書・周禮、既成、頒之學官、天下號曰新義。晚居金陵、又作字說、多穿鑿傳會。其流入於佛老。一時學者、無敢不習、主司純用以取士、士莫得自名一說、先儒傳註、一切廢不用。」とあり、『語類』には「荆公作字說時、只在禪寺中。禪床前置筆硯、掩一龕燈。人有書翰來者、拆封皮埋放一邊。就倒禪床睡少時、又忽然起來寫一兩字、看來都不會眠。字本來無許多義理、他要箇箇如此做出來、又要照顧須前後、要相貫通。」(本朝四 自熙寧至靖康用人)一三〇・三一〇)、「王介甫三經義固非聖人意、然猶使學者知所統」。不過專念本經、及看注解、而以其本注之說爲文辭、主司考其工拙、而定去留耳。豈若今之違經背義、恣爲奇說、而無所底止哉。當時神宗令介甫造三經義、意思本好。只是介甫之學不正、不足以發明聖意爲可惜耳。」(朱子六 論取士)一〇九・2694)などと論じられる。

114 前輩做文字、只依定格依本分做、所以做得甚好。後來人却厭其常格、則變一般新格做。本是要好、然未好時先差去聲。異了。又云、「前輩用言語、古人有說底固是用、如世俗常說底亦用。後來人都要別撰一般新奇言語、下梢與文

章都差異了。却將差異底說話換了那尋常底說話。燕。

一昔前の人が文章を作るときは、もっぱら定型と基本に従って作っているから、よく出来ているのだ。後の人は定型をいやがって、何か目新しい型に變えて作る。もともとよかれと思つてはしたが、よくなる前におかしくなつてしまふ。」またいわれるには、「前の世代の人がことはを用いるときは、昔の人の言葉があればむろんそれを用い、世俗の通常の言葉もまた用いた。後の人はべつに新奇な言葉をひねり出そうとして、結局文章もまるでおかしくなつてしまつた。〔なのになつうの言い方をおかしな言い方に換えてしまつている。〕」呂燕記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「却將差異底」以下が細字雙行(諸本同)。本文はそれに従つた)

(注) 「定格」は、さだまつた形式、「本分」は基礎、基盤。また「本領」「本柄」などと同義に用いる。「今來專去理會時文、少間身已全做不是、這是一項人。又有一項人、不理會時文、去理會道理、少間所做底事、却與所學不相關。又有依本分、就所見定是要躬行、也不須去講學。這箇少間只是做得會差、亦不至大狼狽。只是如今如這般人、已是大段好了。」

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

〔學七 力行〕二二・243)

「一般」は、一種の、ある種という意味。

「差異」は、奇異な、おかしなという意味。「載鬼一車」等語所以差異者、爲他這般事は差異底事、所以却把世間差異底明之。世間自有這般差異底事。〔易八 睽〕七二・1830)

115 問「舍弟序子文字如何進工夫」云云。曰、「看得韓文熟。」饒錄云、「看一學者文字、曰、「好好讀得韓文熟。」又曰、「

要做好文字、須是理會道理。更可以去韓文上一截、如西漢文字用工。」問、「史記如何。」曰、「史記不可學、學不成、却顯了、不如且理會法度文字。」問後山學史記。曰、「後山文字極法度、幾於太法度了。然做許多碎句子、是學史記。」又曰、「後世人資稟與古人不同。今人去學左傳國語、皆一切踏踏地說去、沒收煞。」揚。

「わかい者の學ぶ文章はどんなふうにも勉強したらいいのでしょう」などと尋ねると、「韓文をよくよむことだ」といわれた。饒錄には、ある學生の文章を讀んで、「よくよく韓文をよむことだ」といわれた、とある。またいわれるには、「よい文章を書くには、まず道理をつかむことだ。さらに韓文

の一つ前にさかのぼって、前漢の文章を勉強するのもよろう。「史記はいかがでしょう」と尋ねると、いわれるには、「史記は學んではいけない。ちゃんと學べないと、とんでもないことになる。きちんとした文章をまず習得するのがよい。」後山が『史記』を學んだことについて尋ねると、いわれるには「後山の文章はきわめてきちんとしていて、きちんとしすぎるぐらいだが、ばらばらの文も多く、それは『史記』を學んだところだ。」またいわれるには、「後世の人の資質は古人とちがう。いまの人は『左傳』や『國語』を學ぶと、何もかもだらだらと述べたてて、止めどがない。包揚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「韓文」は、韓愈の文章。

「舍弟序子」は解し難い箇所である。ここでは「序子」を「舍弟」と同構造の語ととらえ、「庠序(學校)へ通う學徒の意に解し、四字で「身の年若の者」として譯した。但し「序子」が學校そのものを指すのであれば、「舍弟が學校で(學ぶ)」という意にならう。「舍弟」は弟の意。

「一截」は、一段、一區切り。「截」は量詞で、ある一定の區切りを示す。

「後山」は、陳師道。『史記』を學んだことについては「論文上」84條を參照。  
「煞」は「殺」に同じく程度の激しいことをいう。76條の「合殺」の用法に同じ。

116 文字奇而穩方好。不奇而穩、只是闌鞞。燾。

文章は個性的で手堅いのがよい。個性がなくて手堅いのは、だらだらするばかりだ。呂燾記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「闌鞞」は、しまりのないこと。「論文上」17條參照。

117 作文何必苦留意。又不可太類塌、只略教整齊足矣。文蔚。

文章を作るのに何もそう凝る必要はない。いい加減すぎるのもだめだが、だいたい整うようにすれば充分だ。陳文蔚記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「類塌」は、いい加減なこと。「學者平居議論多類塌、臨事難望它做得事。」(朱子十八 訓門人九)一一一・2945)

「整齊」は、きちんとしていること、整っていること。

118 前輩作文者、古文有名文字、皆模擬作一篇。故後有所作時、左右逢原。

一昔前の文章家は、古人の有名な文章を、必ず模擬したものだ。だから自分で作る段になっても、自由自在だった。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「左右逢原」は、『孟子』離婁下の「孟子曰。君子深造之以道。欲其自得之也。自得之。則居之安。居之安。則資之深。資之深。則取之左右逢其原。故君子欲其自得之也。」にもとづく。

119 因論詩、曰、「嘗見傅安道說爲文字之法、有所謂「筆力」、有所謂「筆路」。筆力到二十歲許便定了、便後來長進也、只就上面添得些子。筆路則常拈弄時、轉開拓。不拈弄、便荒廢。此說本出於李漢老、看來作詩亦然。」雉。

そこで詩を論じていわれるには、「以前傅安道が、文章の書き方を説いて、「筆力」なるものがあり「筆路」なるものがあるといっているのを目にした。筆力は二十歳ぐら

いで定まってしまい、あとで進歩したところで、表面にいくらか付け加わるだけだ。筆路は、いつも筆を手にしていればどンドン開けるが、筆を持たないと、すぐにさびれてしまふ、とね。この説は李漢老から出たものだが、どうやら詩を作るのも同じだね。」吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「嘗見傅安道說爲文字之法」↓「嘗見傅安道「自得(細字雙行)」說爲文字之法」 「看來作詩亦然」↓「看得來作詩亦然」

(注) 「傅安道」は、傅自得(一一一六―一一八三)、安道は字。朱子に「傅公行狀」(『朱文公文集』卷九八)がある。「宋史翼」卷一二。

文章が若い頃に定まってしまふことについては、「論文上」17條を参照。

「李漢老」は、李邴(一〇八五―一一四六)、漢老は字。雲龜と號する。朱子に「雲龜李公文集序」(『朱文公文集』卷七六)がある。「宋史」卷三七五。

「筆力」は、文章の勢い、力強さ。「歐公文字大綱好處多、晚年筆力亦衰。曾南豐議論平正、耐點檢。李泰伯文亦明白好看。」(本朝四 自熙寧至靖康用人)一三〇・三二二)

「筆路」は、文章の流れ。

「拈弄」は、手に取ること。「有拈弄得熟底、只把在手上、

便知是若十斤兩、更不用稱。此無他、只是熟。今日也拈弄、明日也拈弄、久久自熟。也如百工技藝做得精者、亦是熟後便精。」(朱子一五 訓門人六)一一八・三〇〇)

120 因說伯恭所批文、曰、「文章流轉變化無窮、豈可限以如此。」某因說、「陸教授謂伯恭有箇文字腔子、才作文字時、便將來入箇腔子做、文字氣脈不長。」先生曰、「他便是眼高、見得破。」

そこで伯恭批點の文章についていわれるには、「文章は變轉極まりないのに、こんなふうには制約できようか。」私がおそこで、「陸教授は、伯恭には文章の型があつて、文章を作るときには、その型にはめこんでしまうので、文章の氣脈が伸びない、といわれました。」と申し上げると、いわれるには、「彼は目が高いね。見抜いているよ。」といわれた。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「入箇腔子做」↓「入箇腔子故」

(注) 「伯恭」は、呂祖謙。「伯恭所批文」は、例えば『古文關鍵』に見るような呂祖謙の評點を指すのであろう。

「陸教授」は、陸九齡(一一三二—一一八〇)、字は子壽、陸九淵の兄で、二陸と稱された。全州の教授に任じられたため、陸教授と云う。諡は文達、復齋先生と稱された。朱子に「祭陸子壽教授文」(『朱文公文集』卷九四)がある。『宋史』卷四三四、『宋元學案』卷五七。

「腔子」は、型・枠組。論文篇上第14條を參照。

121 至之以所業呈先生、先生因言、「東萊教人作文、當看獲麟解、也是其間多曲折。」又曰、「某舊最愛看陳無己文、他文字也多曲折。」謂諸生曰、「韓柳文好者不可不看。」道夫。

至之が自分の書いたものを先生にさし上げた。そこで先生がいわれるには、「東萊は作文を教えるのに、まず「獲麟解」を讀めといっている。やはりそこには曲折が多いからだ。」またいわれるには、「私はむかし陳無己の文章がいちばん好きだった。彼の文章も曲折が多い。」學生たちにいわれるには、「韓柳文のよいものは讀まねばならんよ。」

楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「至之」は、楊至、朱子門人。

「東萊」は、呂祖謙。

「獲麟解」は、韓愈の文、『韓昌黎文集』卷一。呂祖謙

「古文關鍵」は、冒頭にこの文章を載せる。

「陳無己」は、陳師道。

122 人要會作文章、須取一本西漢文、與韓文、歐陽文、南豐文。燕。

文章をうまく書くには、まず前漢の文章と、韓愈・歐陽修・曾南豐の文章に學ぶことだ。呂燕記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「一本」↓「部」

123 因論今日舉業不佳、曰、「今日要做好文者、但讀史漢韓柳而不能、便請斫取老僧頭去。」

そこで今の科擧の文章がだめなことを論じていわれるには、「いま立派な文章を作ろうとする者は、『史記』『漢書』『韓柳文』さえ讀めばいい。それでだめなら、どうぞわしの首を持っていつてくれ、だ。」

朱子語類論文篇譯注(四)(興膳・木津・齋藤)

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

朝鮮古活字本 「今日要做好文者」↓「今人要做好文者」

「史漢」↓「漢史」

(注) 「請斫取老僧頭去」は、趙州和尚の言葉。「讀書法上」91條參照。

124 嘗與後生說、「若會將漢書及韓柳文熟讀、不到不會做文章。舊見某人作馬政策云、「觀戰、奇也。觀戰勝、又奇也。觀騎戰勝、又大奇也。」這雖是粗、中間却有好意思。

如今時文、一兩行便做萬千屈曲、若一句題也要立兩脚、三句題也要立兩脚、這是多少衰氣。」賀孫。

かつて若い者に向かつていわれた、「もし漢書と韓柳文を熟讀できたら、文章がうまくならないはずがない。昔ある人の「馬政策」という文章に、「戰を觀るは、奇なり。戰勝を觀るは、また奇なり。騎の戰勝を觀るは、また大いに奇なり。」とあるのを目にした。これはあらつばいが、中身には面白いところがある。今どきの時文は、一二行の文章にも複雑極まる曲折を作り、一句でいうことも對偶でいい、三句でいうことも對偶でいおうとする。なんと腑抜

けたがまだろう。葉賀孫記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「馬政策」は、未詳。

125 後人專做文字、亦做得衰、不似古人。前輩云、「言衆人之所未嘗、任大臣之所不敢。」多少氣魄。今成甚麼文字。節。

後世の人はもっぱら文章を作り、しかも腑抜けたものしか作れず、古人とは似ても似つかない。一昔前の人は「衆人の未だ嘗てせざる所を言い、大臣の敢てせざる所を任う」といったものだ。何たる氣魄。今の文章のざまは何だ。甘節記す。

(注) この「前輩」の言葉については、未詳。

譯注者後記 本稿作成の過程で中純子、梁明珠、西岡淳、幸福香織、蔡毅の諸君による譯注の草稿を参照した。また、金文京氏より教示を受けた箇所がある。謝意を表す。